

William BlakeのImaginationについての一考察

その他（別言語等） のタイトル	A Study of William Blake's Imagination
著者	狐野 利久
雑誌名	室蘭工業大学研究報告
巻	5
号	2
ページ	1029-1044
発行年	1966-08-25
URL	http://hdl.handle.net/10258/3295

William Blake の Imagination についての一考察

狐野利久

A Study of William Blake's Imagination

Rikyu Kono

Abstract

Shelley discriminates Imagination, the essence of poetry, from our reason, and Keats regards it as truth. What can we say about Blake?

Blake, a predecessor of Romanticism, regards it not merely as an immanent being inside us and a non-discriminative Wisdom which works as an embracing Love: he also regards it as a mental state in which we look upon all things as they are, and as a world that All is One and One is All.

As a way to Blake, it is very helpful for us to study Buddhism, because we often find something oriental or something similar to Buddhism in his thought. His famous poem "On Another's Sorrow" in *The Songs of Innocence*, for instance, can be easily comprehended when we have an understanding about the relation between Prajñā (Wisdom) and Karuṇā (Love) in Buddhism. Or, when we grasp the meaning of the "anekārtha-anānārtha (non-identification-and-non-differentiation) by Nāgārjuna, an Indian Buddhist philosopher, the following words by Blake also give us an understanding: *Man is All Imagination. God is Man & exists in us & we in him.*

This paper is one of the results of my study from such point of view.

「Shelley は詩の核心たる imagination を reason (理性) と区別し (Defence of Poetry), Keats は imagination がこそが真実 (truth) を生むものだと言った (Letters)」¹⁾ というが、彼等の先駆者ともいうべき Blake の場合においては、どうなのであろうか?

私は、そのような立場に立って、Blake の Imagination について考察を試みてみようと思うのである。

1.

Blake は、1799 年 8 月 23 日日付の Dr. Trusler にあてた手紙の中で

You certainly Mistake, when you say that the Visions of Fancy are not to be found in This World. To Me This World is all One continued Vision of Fancy or Imagination, ...²⁾

(幻像は此の世に存在しないと君がいうのは、明らかに間違っている。私にとって、此の世界はすべて一つの連続せる幻像、すなわち、想像である。)

とのべ、the Visions of Fancy, すなわち、Imagination の実在を主張している。では、一体 Imagination とは何なのかということになるが、Blake はこれについて、次のように説明している。

A Spirit and a Vision are not, as the modern philosophy supposes, a cloudy vapour, or a nothing: they are organized and minutely articulated beyond all that the mortal and perishing nature can produce.³⁾

(精霊と幻像とは、近世哲学が仮定しているように、もうろうとした煙霧、又は無を意味するものではない。彼らは、此の世のはかない性質のものが、つくり得るところのあらゆるものを超越して、組織され、微細に連結されているのだ。)

This world of Imagination is the world of Eternity; it is the divine bosom into which we shall all go after death of the Vegetated body. This world of Imagination is Infinite & Eternal, whereas the world of Generation, or Vegetation, is Finite & Temporal. There Exist in that Eternal World the Permanent Realities of Every Thing which we see reflected in this Vegetable Glass of Nature.⁴⁾

(此の想像の世界は永遠の世界である。その世界は、吾々が地上の肉体からはなれた後、すべて入って行く神のふところでもある。此の想像の世界は、無限であり、永遠であるが、これに反して、発生もしくは、生育の世界は、有限で又瞬間的である。此の永遠の世界には、一切のものの永遠なる実体が存在していて、その相を吾々は、此の世の自然という鏡に写されるのを見るのである。)

In Great Eternity every particular Form gives forth or Emanates
Its own peculiar Light, & the Form is the Divine Vision
And the Light is his Garment. This is Jerusalem in every man, ...⁵⁾

(永遠の世界においては、どんなものでも、己れ自身の光を発し流出する。その相は聖なる幻像であり、その光は彼の衣服である。これがイエルサレムであって、あらゆる人々の心の中にあるのである。)

云云。これらの説明から、Imagination とは、雲をつかむような、もうろうとしたものではなく、あらゆる人々の心の中にある普遍性をもった永遠の世界であり、又、そのような世界においては、物みな、それぞれ光り輝やき、神々しい相をとって存在している、そういう世界なのであるというように解せられる。そうして、そのように、Imagination は、人間一人一人にあるものであるにもかかわらず、吾々はそのような想像の世界、普遍性、真実性をもった Imagination の世界を認識し得ないがために、Dr. Trusler のように、或は又、近世哲学のように、その存在を疑い、否定しようとすることになるのであるというのが、Blake の主張のようである。

2.

それでは、なぜ、そのような想像の世界を認識し、感得することが出来ないのであろうか？ Blake によると、それは吾々人間にある理性——彼はそれを Spectre (幽鬼) と名づけている——が、さまたげるからであるというのである。すなわち、

The Spectre is the Reasoning Power in Man, & when separated
From Imagination and closing itself as in steel in a Ratio
Of the Things of Memory, It thence frames Laws & Moralities
To destroy Imagination, the Divine Body by Martyrdoms & Wars.⁶⁾

(幽鬼とは、人間にある理性の力である。想像から分離し、自らを鉄の鎖の中に閉じることが如く、記憶の率に閉じる時、法則と道徳とは組織され、その結果、殉難と争いによって、聖体なる想像を破壊するのである。)

吾々は、理性によって物を見、判断する場合、そこに「見るもの」と「見られるもの」という二つの立場が必然的に作り出され、対立が生じ、その結果「見るもの」の私は、その対象である「見られるもの」を限りなく分別し、分析して行こうとする。そうして、その結果、「見られるもの」は、理性の刃のために破壊されてしまうことになるのであるが、それはまさに Blake がいうように、

The Combats of Good & Evil is Eating of the Tree of Knowledge.
The Combats of Truth & Error is Eating of the Tree of Life.⁷⁾

ということであって、聖書にも記してあるように、智慧の実をたべることにもなり、又、生命の樹を食して、死の樹 (the Tree of Death) たらしめることにもなるのである。かくの如く、理性にもとづいて対象を分別し、分析して行くと、そこに一つの法則というものが必然的に作り出されて、今度は、その法則にしばられて、吾々は行動するようになるのである。その結果、理性は

…Satan, the Spectre of Albion, Who made himself a God & destroyed the Human Form Divine.⁸⁾

と Blake がいつているように、吾々を束縛する絶対者 (God) となり、吾々の自由をうばうものとなってしまうのである。現代に生きている吾々も、Blake がいうように、理性を絶対的な神の座にすえつけ、理性のみを唯一のよりどころとして、生きているということが、いえるのではなからうか？⁹⁾ それだからこそ、吾々の理性によって、想像を理解しようとしても、分析の対象になるだけであって、真の理解は生じえないことになるから、

My Spectre around me night & day
Like a Wild beast guards my way,

My Emanation far within
Weeps incessantly for my Sin.¹⁰⁾

(私の幽鬼は昼夜私のまわりに、
野獣の如くに、私の道を守っている。
私の流出は、心の奥深くにて、
私の罪のために絶えず泣いている。)

という悲嘆が出てくることになるのである。

この場合の Emanation とは、理性である Spectre に対応する言葉であって、 Spirituality とか、 Inspiration とかいうことを意味するものと考えられるので、要するに、 Imagination そのものの働き、或は Imagination の自己展開の相ということが、 Emanation ということだというように思われるのである。もともと、 Spectre と Emanation とは、完全に一つになった相 (perfect union) において、調和的にあるものであるのだが、たまたま、 Spectre が Imagination から分離して、勝手に、独自の行動をとるようになると、 Spectre のために Imagination が流出し、働き出すということがさまたげられて、永遠の世界である Imagination そのものが、吾々と断絶したままになるので、その結果、私自身のものとして Imagination を感得することが出来なくなってしまうのである。

Blake においては、このような Imagination そのものの働らきともいうべき Inspiration が、人並はずれて強烈であった。周知の如く、 Blake には、「老いた神があらわれて、窓からのぞきこんでいるのを見た」とか、「一本の樹に天使が鈴なりになっているのを見た」とか、或は「多くの天使が草を刈っている人達の間を歩いているのを見た」とかという話が色々残っているが、このような数々の話は、吾々の理性を尺度にして考えては、とうてい理解し得ない事柄なのである。1800年5月6日日付の William Hayley あての手紙をみると、

Thirteen years ago I lost a brother & with his spirit I converse daily & hourly
in the Spirit & See him in my remembrance in the regions of my Imagination.
I hear his advice & even now write from his Dictate.¹¹⁾

(13年前私は一人の弟をなくしました。それからというもの、私は霊において、毎日毎時、弟の霊と語り合い、私の想像の国において私の思出の中に弟と合っております。私は弟の忠告をきき、又今でも弟の指図によって書いております。)

とある。此の場合の Robert は、想像の世界の主人であり、又 Blake 自身の本来的な姿でもあると考えられるのである。そうして、弟の advice をきき、弟の Dictate によって書くということは、とりもなおさず、彼の理性によるのではなくて、 Imagination そのものの働きともいうべき Emanation によって表現するのだということを云うのであると思われる。いいかえれば、 Imagination そのものが彼に働きかけ、彼に書かせるのだということなのである。こ

のことは、又、1799年8月16日日付の Dr. Trusler あての手紙の中で、

And tho' I call them (=Designs) Mine, I know that they are not Mine, being of the same opinion with Milton when he says that the Muse visits his Slumbers & awakes & governs his Song when Morn purples the East.¹²⁾

(そうして、私はこれらの作品を私のものだとはいいませんが、その実私のものではないということを、私は知っています。それは丁度「明け方の空がしのめになる頃、ミューズの神がやって来て、私を眠りから覚まし、私の歌をみしてくれるのです」といったミルトンと、同じ考えなのです。)

といっていることから、云い得ることであろう。又、Songs of Innocence の Introduction の歌の中で、周知のように、雲間にあらわれた子供の要請で、書きあらわすことになったことをのべているが、此のこともやはり、Imagination が、詩 (poem) を書かせるということであろう。そのような心境において、詩人は筆をとるから、書き上げられた詩というものは、Imagination そのものの自己表現ともいべきものであって、読む者の心をとらえずにおかなくなるのは当然なのである。

3.

そこで、私は、Imagination の世界は、普遍性、真実性をもった永遠の世界であるということが、その場合の普遍性、真実性とは、どういう意味なのかということ、更にもっと、考察してみようと思うのである。それは、或る意味では、理性による分別とか、分析とかということになるが、いやしくも真理 (Wahrheit) というものが、universal なものであるがためには、常に論理性というものが要求されるものであるからである。

Milton O. Percival は、彼の著書である William Blake's Circle of Destiny の中で、

The highest level of intellect...is imagination. ...The lowest level of intellect is that form of rationalism.¹³⁾

ということをしている。最低のレベルの知性というのは rationalism の相であるということであるから、すでにのべたように、Blake のいう Spectre、すなわち、法則や道徳をつくり出す理性のことであろう。では、最高のレベルの知性とは何かということになるが、これは先程来ののべている Inspiration とか、Spirituality、Blake の言葉でいえば Emanation ということであろう。これを、東洋の方の言葉でいえば、例えば、仏教でいうところの無分別智 (nirvikalpa-jñāna)、すなわち、prajñā (般若智) であろう。

仏教では、分別智 (vikalpa-jñāna) は物事を、例えば、善悪と二元的 (dualistic) に分別するのに対し、無分別智は、善と悪とは equal であると共に、善と悪とは equal ではないというふうに認識するものだということを教えている。つまり無分別智は、二つの矛盾せる対立概念

——例えば善悪というもの——を、矛盾し対立したままで受け取っていかうとするものなのである。したがって、このような無分別智にもとずいて、一切をながめると、Blakeが引用している Swedenborg の言葉でいえば、

Two Opposite, disposed in a similar Situation against each other, are contained in Connection.¹⁴⁾

(二つの対立が、互に対立したままで、互に手をにぎっている。)

ということになるのである。又無分別智は、このように物事があるがままにおいて受けとり、認識して行くから、Blake のいうように

…One must be All And comprehend within himself all things both small and great, …¹⁵⁾

(一は多であり、己の中に小も大もありとあらゆるものを含まねばならぬ。)

ということにもなって、物事を、一即多・多即一の関係において認識していくということにもなるのである。このようにみえてくると、前にのべた Percival の言葉、すなわち、The highest level of intellect is imagination ということは、どういうことになるのであるかということになるが、要するに、Imagination の世界は、無分別智の世界であり、一即多・多即一の関係においてなりたっている、差別即平等の世界であるということだと、了解されるのである。

このような、一切を差別即平等においてみる無分別智が、直接分別智を押し分けて、働き出してくると、一切のものをそのままの相において愛しむという心が、生じてくるのである。Songs of Innocence の歌の中に、On Another's Sorrow という歌があるが、この歌の前半は、

Can I see another's woe,
And not be in sorrow too?
Can I see another's grief,
And not seek for kind relief?
Can I see a falling tear,
And not feel my sorrow's share?
Can a father see his child
Weep, nor be with sorrow fill'd?
Can a mother sit and hear
An infant groan, an infant fear?
No, no! never can it be!
Never, never can it be!¹⁶⁾

(他人の悩みを見て、
自分も悲まずにをられるか?
他人の嘆きを見ながら、

いたはり慰めずにすまされるか？

はふり落つる涙を見て、

わが悲しみの配分を感じずにをられるか？

父親がわが子の泣くのを見ながら

悲しみに胸ふたがずにをられるか？

母親は坐して聞くことが出来るか

幼児の呻くのを、幼児の悲むのを？

いな、いな！ 決してできはしない！

決して、決してできはしない！¹⁷⁾

という歌であるが、「だまっておれない」とか、「じっとしておれない」とかという気持は、無分別智の慈悲的展開の相すがたに外ならない。Blake は、

When Love is in Wisdom, then it existeth. These two are such a ONE, that they may be distinguished indeed in Thought, but not in Act.¹⁸⁾

(愛が智慧の中にある時、愛があるということになる。愛と智慧とは一つのものであって、考えの上においては二つに分けられるが、働らく相においは分けられない。)

という Swedenborg の言葉に対して、

Thought Without affection makes a distinction between Love & Wisdom, as it does between body & Spirit.¹⁹⁾

(愛をともしない考えというものは、丁度、肉体と精神とを区別するように、愛と智慧とを区別するものだ。)

と注釈しているが、冷たい論理においては、愛 (Love) と智慧 (Wisdom) とは区別されるけれども、Imagination の世界においては、愛と智慧とは、不一不異の関係においてあるのであるから、無分別智である智慧 (Wisdom) の働らく相が、そのまま愛になるのである。そのように、すべてをあるがままの相において愛しみ、com-passion の心をいただく時、

Where Mercy, Love & Pity dwell
There God is dwelling too,²⁰⁾

(慈悲、愛、憐憫のあるところに、
神もおわしたもう。)

であって、神は愛なりということが、云い得るのである。又、愛の相をとる無分別智という智慧 (Wisdom) は、吾々の分別智である理性を押し分けて、働き出すものであると、前にのべたが、そういう意味で、生命の源、或は、生命そのものということが、云えると思うのである。

Blake も、

…the source of life
Descends to be a weeping babe.²¹⁾

(生命の源が降り来たり、
泣いている赤子となる。)

といっている。まさしく、神は愛なり、愛は生命^{いのち}なりである。Blake は、On Another's Sorrow
の後半において、

And can he who smiles on all
Hear the wren with sorrows small,
Hear the small bird's grief & care,
Hear the woes that infants bear,

And not sit beside the nest,
Pouring pity in their breast;
And not sit the cradle near,
Weeping tear on infant's tear;

And not sit both night & day,
Wiping all our tears away?
O! no never can it be!
Never, never can it be!

He doth give his joy to all;
He becomes an infant small;
He becomes a man of woe;
He doth feel the sorrow too.

Think not thou canst sigh a sigh
And thy maker is not by;
Think not thou canst weep a tear
And thy maker is not near.

O! he gives to us his joy
That our grief he may destroy;
Till our grief is fled & gone
He doth sit by us and moan.²²⁾

^{ものみな}衆生にほほゑみたまふ^{しゆ}主が

小さな鷓鴣^{みそぎさい}の悲しみを聞きながら、
小さな鳥の憂ひと煩ひを聞きながら、
幼児の耐へしのぶ悩みを聞きながら、

鳥の巢のかたはらに坐って、

彼等の胸に憐みをそそぐことなく、
 また揺籃ゆりかごの近くに坐って、
 幼児の涙を涙で濡らすこともなく、
 また夜となく昼となく坐って、
 われらの涙を拭き去ることもなくをられるか？
 いな、いな！ 決してできはしない！
 決して、決してできはしない！
 主しゅはその喜びものみなを衆生しゆじやうに与へたまふ。
 主はいたいけな嬰兒みどりごとなりたまふ。
 主はなやみある人となりたまふ。
 主はまた悲しみをも痛感したまふ。

思ふ勿れ汝たぬが溜息ためいきをつくとき、
 汝の主かたへにいまさずと。
 思ふ勿れ汝が涙にくるとき、
 汝の主ちかくにいまさずと。

おお！ 主は我等の悲みを亡くせむとて
 われらにその喜びをわかちたまふ。
 われらの悲しみが退散するまで、
 主は我等かたへの傍かたへに坐して哭きたまふ。²³⁾

と Blake は歌っているのであるが、このような、吾々の無分別智の働く相をとらえて歌っているのであると考えられる。

4.

このようなわけで、Imagination はその働く相すがたにおいて、無分別智なる智慧 (Wisdom) となり、愛 (Love) となるものであるから、Imagination は、神であるということも云い得るのである。神とは何かという問いは、すべての人によって問われる問いであるが、Blake は、

…there is no other God than that God who is the intellectual fountain of Humanity.²⁴⁾

(人間性という知的源泉である神以外に神はない。)

というように答えている。知的源泉 (the intellectual fountain) とは、まさしく仏教でいう無分別智である智慧に外ならないし、したがって又、愛でもあり、生命でもあるのである。そう

して、それが、humanity ともいわれるものであるから、

Human nature is the image of God.²⁵⁾

と、Blake も云っているように、そういう心をもった人は、実に神に外ならないのである。

Man is All Imagination. God is Man & exists in us & we in him.²⁶⁾

(人間はすべて想像である。神は人間であって、吾等の心に住み給まい、又、吾等も神の御心の中に住むのである。)

それ故、Blake には、人間以上に偉大なるものは認められなかったようで、

In all the Heavens there is no other Idea of God than that of a Man.²⁷⁾

(すべて天国においては、人間以外に神のことなど考えられない。)

という Swedenborg の言葉を註釈して、Blake は、

Man can have no idea of any thing greater than Man, as a cup cannot contain more than its capaciousness. But God is a man, not because he is so perciev'd by man, but because he is the creator of man.²⁸⁾

(人間は人間以上の偉大なるものについては、何も考えることが出来ないからだ。それは丁度、コップがその受容能力以上のものを入れることが出来ないようなものだ。だが、神は人間である。それは、神が人間によって認識されるからではなくて、人間の創造者であるからに外ならない。)

といているのである。ここで、注意しなければならないのは、人間の創造者 (the creator of man) という言葉である。S. Foster Damon は、彼の著書である William Blake において、creation という言葉を

Creation is an act of the Divine Mercy.²⁹⁾

と説明しているので、creator of man という言葉の意味は、小鳥や動物はいうに及ばず、草木の一つ一つにいたるまでも、愛しみの心もち、やさしい慈悲の気持をもって振舞う人というような意味であろう。しかしながら、一切のものに愛しみの心を注ぐということは、天国にまします神に喜ばれるために善いことをするのだとか、天国に宝をつまんがために、慈善を行なっているのだとかというように、分別智にもとずいた意識的行為であってはならないのであって、On Another's Sorrow において、すでに見たように、他人の不幸をみて、涙を流さずにはおれないとか、泣いている赤子にじっとしておれないとかというような、無意識の意識において振舞う行為でなければならないのである。無意識の意識において愛を行なう人は、実に美しく、神々しいから、正しく神そのものというべきであろう。

The Imagination is not a State: it is the Human Existence itself.
Affection or Love becomes a State when divided from Imagination.³⁰⁾

(想像は状態ではなく、人間存在そのものである。情熱も愛も、想像をはなれては、単なる状態にすぎない。)

とも Blake はいっている。そのような聖らかな、美しい、神々しい行為をする人の心そのものが、Imagination なのである。それ故、

We live as One Man ; for contracting our infinite senses
We behold multitude, or expanding, we behold as one,
As One Man all the Universal Family, and that One Man
We call Jesus the Christ, and he in us, and we in him
Live in perfect harmony in Eden, the land of life, ...³¹⁾

(吾々は全一なる人として生きている。吾々は無限の感覚を縛る時、そこには分離があるが、それを放つ時、吾々は宇宙の一家族としての全一なる人を見るからだ。その全一なる人こそ、吾々はイエス・キリストと呼んでいる。彼は吾々にあり、又吾々は彼にあり、生命の地、エデンに完全なる調和をえて生活している。)

ということになるのであって、想像の世界にあそぶ時、吾々は、イエス・キリストと、不一不異なる関係においてあることになるのである。そうして、生命の地エデン——これは Imagination の世界に外ならないのだが——に、完全なる調和をえて生活することになるのである。そのような、イエス・キリストと不一不異なる関係においてある吾々のあり方というものは、まさにパウロが云った、「もはやわれ生くるに非らず、キリストわれに在りて生くるなり」の心境に外ならない。又、臨済録にあるように、「随处に主となれば、立処皆真なり」という絶対主体性に立った境地でもあるのである。

5.

このようにみえてくると、Blake は、神人一如をとなえたように思われて、何か異常に感ぜられるかも知れないが、決して、罪ぶかいこの肉体を肯定するような無自覚な人間を神に等しいといっているのではなく、仏教の方でも、「衆生本来仏なり」といっているように、無分別智である智慧にもとずいて行動する、自覚的な人間を神に等しいといっているのであると考えるべきであろう。それ故、God is a man という時の man は、Blake の別な言葉でいえば、the true man, 又は the Real man なのである。それは、丁度仏教の方でも、「赤肉壇上に一無位の真人あり、見よ、見よ、」という場合の「真人」と同じ意味なのであって、そういう人間 (the true man) は、又、実に一切のものの根源でもあるのである。すなわち、

The true Man is the source, he being the Poetic Genius.³²⁾

(真人はあらゆるものの根源であり、彼は詩的天才である。)

詩的天才とは、

He who can be bound down is No Genius. Genius cannot be Bound; ...³³⁾

(自己を束縛するものは天才ではない。天才は束縛さるべきではない。)

という Blake の言葉から、理性によって束縛されるべきではないところの Imagination ということであって、Imagination から詩 poetry が湧き出るのであるから、それで詩的 Poetic といったであろう。それ故、

For all are Men in Eternity, Rivers, Mountains, Cities, Villages,
All are Human, & when you enter into their Bosoms you walk
In Heavens & Earths, as in your own Bosom you bear your Heaven
And Earth & all you behold; tho' it appears Without, it is Within,
In your Imagination, of which this World of Mortality is but a Shadow.³⁴⁾

(永遠界においては、すべて人間、河も、山も、町も、村も、
すべて人間である。そうして君がそれらのものの胸中に入ると、
君の胸中に天地を有する如くに、天上や地上を歩むのである。
君が見るものはすべて、外界に存するように見えるが、君の内にあるのであり、
君の想像の中にあるのであって、現象界はその影にしか過ぎない。)

という Blake の言葉も、この Poetic Genius がいわしめているのである。それ故、前にのべた天使が鈴なりになっていたとか、草を刈る人達の間を歩いていたとかいうような、Blake の若き日の体験も、私にいわせれば、この Poetic Genius から流出 (Emanation) した言葉であり、Imagination そのものであると考えるのである。

6.

以上の如く Blake においては Imagination とは、要するに普遍性、真実性をもった永遠の世界ということになるのであるが、その普遍性、真実性という意味について考察してきたことを、ここでまとめてみると以下のようなになる。

吾々が分別智である理性 (Spectre) にもとずいて物を見る限り、一切は差別相をもって眼前するのであるが、そのような理性の働きをしりぞけて、否、押し分けるようにして、吾々一人一人が本来的にもっている無分別智の智慧が現われ出してくると、差別相の世界が、そのまま、平等一味の世界となって光り輝やいてくるのである。この差別即平等の世界、これが Blake のいうところの Imagination の世界なのであって、差別即平等であるから、融通無碍、自由自在の境地であり、普遍性、真実性をもった世界であり、又一切のものが生まれ出ずる根源でもあるのである。それ故に、Imagination は、A Spirit とか、Vision とか、God とか、或は Jesus Christ, the true man, Poetic Genius, 等々とよばれるのである。だから Imagination の世

界は、static な世界ではなく、むしろ dynamic な世界なのであって、理性のために捕えられ、束縛されている人達に、此のような Imagination の世界を覚らせるべく、Imagination 自らが、永遠にわたって、限りのない自己展開を続けているともいえるのである。このような Imagination の展開の相が、無分別智である智慧 (Wisdom) であり、又、智慧の慈悲的展開の相としての愛 (Love) なのでもある。そうして、この智慧に根ざした愛 (Love) によって、人は初めて、人と交わることが可能になるのである。又、このような Imagination によって、人は一粒の砂子に世界を見、一輪の野の花に天国を見ることも可能となるのである。

それ故、理性のみを絶対的なものとして崇め、神を信ぜずに、ただいたづらに善悪の木の実をたべている、未だ覚めざる人達にむかって、Blake は次のように云っているのである。

Awake! awake O Sleeper of the land of shadow, wake! expand!
 I am in you and you in me, mutual in love divine: ...
 I am not a God afar off, I am a brother and friend;
 Within your bosoms I reside, and you reside in me:
 Lo! we are One, forgiving all Evil, Not seeking recompense
 Ye are my members, O ye sleepers of Beulah, land of shades!³⁵⁾

(めざめよ！ おお、影の地の眠れるものよ、めざめよ！ さめて汝を拡大せよ！

吾は汝にあり、汝は吾にあり、互に愛するは神意なり。…

吾は遠きにある神にはあらず、吾は汝の兄弟なり、又友なり。

吾は汝の胸の中に宿り、汝は吾が内に宿る。

みよ！ 吾等は一体なり。すべての罪を許し、報酬を求めず

汝は吾が同胞なり、おお、汝、影の地、ベューラーの眠れるものよ！)

附 記

Blake の William Hayley に送った 1804 年 10 月 23 日日付の手紙をみると、彼は一時、このような Imagination の世界から遠ざかっていたことがあったように思われる。その手紙をみると、

O Glory! and O Delight! I have entirely reduced that spectrous Fiend to his station, whose annoyance has been the ruin of my labours for the last passed twenty years of my life. He is the enemy of conjugal love and is the Jupiter of the Greeks, an iron-hearted tyrant, the ruiner of ancient Greece. ... I was a slave bound in a mill among beasts and devils...³⁶⁾

(おお、何たる栄光だろう！ 何たる喜びだろう！ 私はあの幽鬼をその位置に完全に退ぞけてしまいました。彼から受けた苦悩は、私の生涯のすぎ去った 20 年間における私の仕事の破壊でありました。彼は夫婦の愛の敵であり、ギリシヤのジュピターで

あり、鉄のような心をもった暴君であり、古代ギリシャの破壊者でありました。…私は野獣共と悪魔達との間にある水車にしばられた奴隷でありました。…)

とあり、更に続けて、

…these beasts and these devils are now, together with myself, become children of light and liberty, and my feet and my wife's feet are free from fetters. O lovely Felpham, parent of Immortal Friendship, to thee I am eternally indebted for my three years' rest from perturbation and the strength I now enjoy. Suddenly, on the day after visiting the Truchsessian Gallery of pictures, I was again enlightened with the light I enjoyed in my youth, and which has for exactly twenty years been closed from me as by a door and by window-shutters. … I thank God with entire confidence that it shall be so no longer — he is become my servant who dominned over me, he is even as a brother who was my enemy.³⁷⁾

(これらの野獣共や悪魔達も、今では、私と共にあり、光明と自由の子供達になっております。そうして、私の足も私の妻の足も、足かせから解かれております。おお、愛するフェルフアムよ、不滅なる友情の親よ、三年の間私を擾乱から脱れしめ今の力を得たことを、永遠に汝に負っているのだ。トラッチセンヤン画堂を訪ねた日、突然、私は幼年時代にたのしんだあの光明に、再び輝やかされたのでした。それは丁度 20 年の間、扉と雨戸とによって、私からさえぎられていたのでした。…私は今、確信をもって、かかることが起こらないことを神に感謝しております。私を支配していたものは、私の従僕となり、私の敵であった者すらも、今では兄弟です。)

と書かれている。詩人というものは、前にものべたように、Imagination によって歌うものであるから、

…I Sing According to the inspiration of the Poetic Genius.³⁸⁾

ということになるのであるが、たまたま、理性によって束縛されるようになると、ソロモンが云ったように、「抑圧は賢者を狂人にする (Oppression makes the Wise Man Mad.)」³⁹⁾ということになるから、Blake が狂人にみられ、そのため、長い間、狂人扱いされてきたのも、彼の理性である幽鬼 (Spectre) とのたたかう姿が、狂人のごときものだったからかも知れない。彼の予言詩 (Prophetic Books) といわれる数々の詩集において、Urizen と Los との争いが、深刻にえがかれているのも、そのような事情を物語っているように思われるのである。

かくして、今や、完全なる四性 (the Four Zoas) の調和を得、その結果、清められた知覚の扉 (the doors of perception)⁴⁰⁾を通して、一切のものが、あるがままの相として受け取られるようになった Blake にとって、理性に束縛されている人々を融通無碍なる永遠の世界である Imagination へとむけさせなければならないということを、自己の使命と感じたのであっ

た。それ故、Blake は次のように云うのである。

I rest not from my great task!
 To open the Eternal Worlds, to open the immortal Eyes
 Of Man inwards into the Worlds of Thought, into Eternity
 Ever expanding in the Bosom of God, the Human Imagination.
 O Saviour pour upon me thy Spirit of meekness & love!
 Annihilate the Selfhood in me: be thou all my life!⁴¹⁾

(私は偉大なる仕事をするために休まないのだ！)

その仕事とは、永遠の世界を開くということ、人間内部の不死の眼を
 思想の世界に、神の御胸、人間の想像に限りなく広がる永遠界に開くということ
 ある。

おお、主よ、私に柔和と愛の心を注いでほしい！

私にある自我を寂滅し、汝をして私のすべての生命たらんことを！)

(本稿は昭和40年10月2日、日本英文学会北海道支部第10回大会にて発表したものに加筆したものである)

(昭和41年4月27日受理)

註

- 1) 福原麟太郎編：文学要語辞典，p. 155，研究社（昭和35年）。
- 2) Geoffrey Keynes： *The Complete Writings of William Blake*, p. 793 (*The Letters*), The Nonesuch Press. (1957).
- 3) *Ibid.* p. 576 (*A Descriptive Catalogue*).
- 4) *Ibid.* p. 605 (*A Vision of the Last Judgment*).
- 5) *Ibid.* p. 684 (*Jerusalem*).
- 6) *Ibid.* p. 714 (*Jerusalem*).
- 7) *Ibid.* p. 615 (*A Vision of the Last Judgment*).
- 8) *Ibid.* p. 512 (*Milton*).
- 9) 狐野：人間の主体性について，室蘭工大研究報告第5巻，第1号（昭和40年），pp. 395~405 参照。
- 10) G. Keynes： *The Complete Writings of William Blake*, p. 415 (*Poems and Fragments from the Note-Book*), The Nonesuch Press (1957).
- 11) *Ibid.* p. 797 (*The Letters*).
- 12) *Ibid.* p. 792 (*The Letters*).
- 13) Milton O Percival： *William Blake's Circle of Destiny*, p. 80, Octagon Books Inc. (1964).
- 14) G. Keynes： *The Complete Writings of William Blake*, p. 131 (*Annotations to Swedenborg*), The Nonesuch Press. (1957).
- 15) *Ibid.* p. 272 (*Vala, or the Four Zoas*).
- 16) *Ibid.* p. 122 (*Songs of Innocence*).
- 17) 寿岳文章訳：ブレイク抒情詩抄，p. 41，岩波文庫（昭和6年）。
- 18) G. Keynes： *The Complete Writings of William Blake*, p. 90 (*Annotations to Swedenborg*), The Nonesuch Press. (1957).
- 19) *Ibid.* p. 90 (*Annotations to Swedenborg*).
- 20) *Ibid.* p. 117 (*The Divine Image*).

- 21) *Ibid.* p. 289 (*Vala, or the Four Zoas*).
- 22) *Ibid.* pp. 122-123 (*On Another's Sorrow*).
- 23) 寿岳文章訳：ブレイク抒情詩抄，pp. 41-42，岩波文庫（昭和6年）。
- 24) G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, p. 738 (*Jerusalem*), The Nonesuch Press. (1957).
- 25) *Ibid.* p. 83 (*Annotations to Lavater*).
- 26) *Ibid.* p. 775 (*Annotations to Berkeley*).
- 27) *Ibid.* p. 90 (*Annotations to Swedenborg*).
- 28) *Ibid.* p. 90 (*Annotations to Swedenborg*).
- 29) S. Foster Damon: *William Blake*, p. 441, Peter Smith. (1958).
- 30) G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, p. 522 (*Milton*), The Nonesuch Press. (1957).
- 31) *Ibid.* pp. 664-665 (*Jerusalem*).
- 32) *Ibid.* p. 98 (*All Religions are One*).
- 33) *Ibid.* p. 472 (*Annotations to Reynold*).
- 34) *Ibid.* p. 709 (*Jerusalem*).
- 35) *Ibid.* p. 622 (*Jerusalem*).
- 36) *Ibid.* pp. 851-852 (*The Letter*).
- 37) *Ibid.* p. 495 (*The Letter*).
- 38) *Ibid.* p. 495 (*Milton*).
- 39) *Ibid.* p. 472 (*Annotations to Reynolds*)
- 40) Blake は次のように云っている。

If the doors of perception were cleansed everything would appear to man as it is, infinite.
G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, p. 154 (*The Marriage of Heaven and Hell*), The Nonesuch Press. (1957).

この場合、「知覚の扉が清められる」ということは、眼、耳、鼻、舌等々の感覚器官によって、一切が分別され、分析されるということがなくなることである。つまり理性の働きが、寂滅したことであって、そのとき一切のものは、あるがままに、如実にあらわれてくるというのである。なお、又、Blake は、

I question not my Corporeal or Vegetative Eye any more than I would Question a Window concerning a Sight. I look thro' it & not with it.

G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, p. 617 (*A Vision of the Last Judgment*), (1957).

ともいっている。それ故、Blake にあっては、感覚器官は、単なる外界と内界とが行き交う通路であったのである。

- 41) *Ibid.* p. 623 (*Jerusalem*).